

チェルノブイリ救援・中部が活動を開始した 1990 年以降、ウクライナと日本の絆を固く結ぶ努力を続けてくれたウラジーミル・Y・キリチャンスキーさんが亡くなって 8 年が過ぎた。

ソ連時代から、チェルノブイリ原発事故の影響が最も大きかったウクライナ ジトーミル州の地方紙の主幹として被災者の救援に力を入れ、日本の私たちの活動を支えてくれた。彼の誕生日の 10 月 8 日にはジトーミルで彼の追悼の会が持たれるという。私も今、彼を思い出す。

はじめて会った「キリちゃん」

私が初めて彼に会ったのは 1993 年 12 月、チェルノブイリ救援・中部発足から 3 年目にウクライナを訪問した時だった。当時の印象では彼は殆ど無口で、机に座って黙々と仕事をする実務家、という印象だった。しかし、初めて現地を訪問する日本の団体を如何にスムーズに迎えるか、救援に伴って起こる様々な問題を如何に解決するか…に、彼は日夜奮闘し苦悶していたかはあとで知った。1990 年 12 月に初めて航空便で送った粉ミルク (2 トン) が途中で紛失した事件は、現地の税関や警察・大使館・KGB 迄巻き込んでやっと回収し解決したが、彼の努力がなければ私たちが国内で初めて呼びかけて集めた大金で購入した粉ミルクは途中で横領され、私たちは国内での信頼も失い活動は続かなかっただろう。救援物資や日本からの訪問に伴う様々な問題の解決に、彼は苦悩しつつも黙々と努力を続けていた。そうした事実を始めて知ったのは彼が 2002 年に書いた「わが心の独白」という長い文章を読んだ時だった。

彼は、救援物資が無事に届きスムーズに配布されるだけでなく、日本の私たちの被災者に対する心を如何に大切にすることに心を砕いていた。そのことを知り胸が熱くなったのを今も覚えている。

彼の活動は次第に広く知られるようになり、ある時、全ウクライナ・ジャーナリスト連盟の委員長にならないか、と打診された。ジャーナリストとしては最高の名誉だったはずである。だが彼はその申し出を固辞した。委員長になれば住まいを首都キエフに移さなければならなくなり、ジトーミ



ルの被災者から遠ざかってしまう、というのがその理由だった。「私は被災者とともに生きる」と彼は言ったそうだ。

喧嘩友達の私たち

一方で、ずけずけと言う率直な物言いも彼の特徴だった。私たちが事故処理作業者の支援やナロジチでの菜の花プロジェクトを提案した時、彼は言った。「あんたら日本人にそんな大それた事が出来るはずないだろう」と。だが、彼はその申し出を邪魔するどころか、誠意をもって実現に努力してくれた。菜の花プロジェクトが動き出し、彼はすっかり心を寄せ協力してくれるようになった。「それは良い」という日本語が彼の口癖だった。

被災者に心を寄せて

言うは易く行うは難し、である。被災者の心をくみ取り、何が求められているか、それが真に被災者の助けになるのか、を常に心しなければならぬ。彼から学ぶことはまだまだあった。彼が生きていれば、私と同じ当年 80 歳、食卓を囲んで話し合いたかった。(2020 年 9 月 29 日 河田)